

## ユネスコ「世界の記憶」登録申請の意義と ドイツ館所蔵資料の現状

現在、鳴門市では、徳島県、ドイツのニーダーザクセン州、リュネブルク市の4者共同で、「板東俘虜収容所関係資料」のユネスコ「世界の記憶」登録申請に向け調査を進めています。

ユネスコは、「人種、性、言語又は宗教の差別なく確認している正義、法の支配、人権及び基本的自由に対する普遍的な尊重を助長するために教育、科学及び文化を通じて諸国民の間の協力を促進することによって、平和及び安全に貢献すること」を目的としています。またユネスコ「世界の記憶」とは、人類史上、忘れ去られてはならない貴重な記録を取り上げる事業です。「板東俘虜関係資料」は、戦争を体験した人々が人権尊重の大切さを知り、平和への願いを後世に伝えるもので、ユネスコに登録申請をする意義はここに見て取れます。また「世界の記憶」の目的とは、失われやすい記録資料を最新の技術によって保存を促進、普遍的アクセスを支援し、その存在や重要性の世界的な認識を高めることです。

本館では歴史的文化的価値のある資料を末永く残していくための事業を開始しました。資料の中には、保存状態に問題のある資料が含まれています。特に冊子やプログラム等、酸性紙と呼ばれるものが資料の大半を占めており、年月を経ると変色し脆くなる性質を持っています。またこの酸性紙と合わせ、本館資料に用いられている石版印刷や謄写版印刷のインクなどの劣化挙動について現在のところ研究や事例報告等が少なく、保存や修復等についても未知の部分が多く見られます。この申請を機に最適な保存を考慮した資料管理を行うようになり、これまで所蔵資料の大半がビニールファイルのなかに収められていたのを、現在、中性紙の封筒に入れ、箱に入れ資料室内のドライキャビネットのなかで保管しています。しかし現在の本館の保存や展示環境は温湿度の面から最適とは言えず、今後、素材に適した保存方法を検討していく必要があります。

さらに資料一点一点の状態調査の台帳作成を進めており、現状を把握している段階です。本調査では、目視観察に加え、科学的な視点は不可欠であり、デジタルマイクروسコープに

よる観察や紙の繊維の鑑定、蛍光X線分析等による色材の調査等を行なっています。こうした近代資料の修理・処置方法は確立されているとは言い難く、慎重に検討を重ねながら、必要となる修理や処置の手法についても試行錯誤していかねばなりません。

紙資料の保存に関する調査については、本年度から始まったところであり解決すべき課題はまだ多くあります。しかし、ユネスコ「世界の記憶」の目的にも添う形で、今後も資料の保存調査を進め、末永く保存し、資料の持つメッセージを伝えたいと思います。(長谷川)

### イルミネーションも「第九」100周年

ドイツ館と道の駅「第九の里」の周辺では、3年前から12月になるとイルミネーションが設置・点灯されるとともに、ドイツ館のライトアップも行われ、クリスマスと正月の風物詩になってきています。

今回は昨年12月1日から1月8日の午後5時から9時まで7万5千球に増えたLED球が点灯し、1918年6月1日にドイツ兵捕虜による「第九」アジア初演を記念した「100th」をかたどった光の文字がお目見えしました。また、青・白・金色のイルミネーションが小高い場所の東屋まで拡大され、夜空に浮かぶドイツ館とベートーヴェン像を中心に演出された光の渦は幻想的で、訪れたカップルや家族連れが盛んにカメラにおさめていました。



## 板東俘虜収容所での経済活動

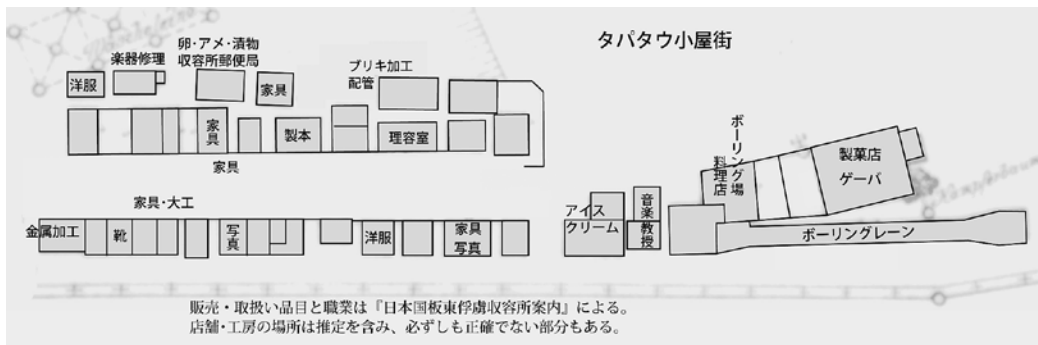
捕虜収容所の中での経済活動と聞くと、奇異な感じがするかもしれませんが。しかし、板東の捕虜たちの自発的な活動の中には、音楽・演劇・講演会などの文化面やスポーツ等の身体的なもの他に、農業のほか商売や手工品の生産、さらには散髪や風呂、料理屋といったサービス業まであったのです。要するに捕虜同士の金銭の授受を伴う経済活動がありました。

そもそも収容所の中で経済活動をしていたこと自体、不思議なことに思えます。捕虜同士の金銭の授受だけに注目すれば、音楽会や演劇、講演会の入場料を取ったり印刷物の販売があれば、そこに発生するわけで、何も板東に限ったことではありません。しかし陸軍上層部からは捕虜の手持金額を1ヵ月当たり30円に限定するように指導されており、収容所の中での捕虜による実業活動は想定されていませんでした。松江収容所長はこれに対し、捕虜同士の金銭の貸し借りと所内の店舗の物品の購入などがあり、この制限に従えないことを回答しています。板東ではすでに大幅に経済活動が展開されていたからです。実際にどの程度の金額の投資が行われていたのか、具体的な数字は判りません。ただ、幸いというか不幸というか、捕虜経営の浴場が全焼したときの警察官の報

告があって、それによると損害額が2千円とされています。今の金額に直すと6百万円ほどでしょうか。これほどの大金を収容所内の私的な施設に出資した人物がいたし、収容所側もそれを許容していたわけです。

こういった実業活動に伴う店舗や工房を収容する小屋は収容所内に数十棟建築されましたが、それを建てたのも捕虜中の本職の大工を中心とする人たちです。もちろん素人が自力で建てたらしいものも見受けられますが。こういった店舗では食料品だけでなく、写真屋や家具屋、薬局、製菓店などがありました。一方、独立の小屋を持っていない人は兵舎内の自室でビールやタバコを販売したり、散髪屋を開業していました。こういった活動の様子を紹介するため、今年の2月1日から3月4日にかけて「板東俘虜収容所内の店舗と工房」という企画展示を行いました。

ところで、所内にはいくつか料理店があり、そのひとつについて外部からの賓客が所長の案内でディナー・コースを振舞われたときのことを書いていますが、料理はとても美味しく、ボーイの作法も本格的であったそうです。また、ドイツ館の所蔵する写真の中に、パーティに向けてテーブルをセットしたのがあります。およそ収容所内らしからぬ光景で驚かされます。(川上)



## ドイツ館で小学生が「なると第九」学習

1918年6月1日に板東俘虜収容所のドイツ兵捕虜たちによってベートーヴェン第九交響曲の全楽章がアジアで初めて演奏されてから100周年を翌年度に控えた2017年度には、鳴門市内の小学生がドイツ館を訪れ、鳴門における「第九」の由来などを学びました。

これは、鳴門の「第九」をブランド化するプロジェクトの一環として、市内の全小学校の5年生を中心に「第九」アジア初演にゆかりのある史跡や施設を訪問し、現在の「なると第九」の歴史的背景を学び、ドイツ兵捕虜と地元民との交流による「友愛の精神」の理解を深めようと、2016年度から実施してきた教育活動です。

12月6日も明神小学校と瀬戸小学校の5年生31人がドイツ館を訪れ、捕虜たちと地元民の交流の経緯等を描いたドイツ村BANDOロケ村保存会の紙芝居を見た後、職員の案内で館内の展示を見て回りました。子どもたちは、収容所全体の模型前では職員の説明に熱心にメモをしたり、当時の映像と

ロボットによる第九初演再現を模したコーナー「第九シアター」では、演奏が終わると大きな拍手をしたりしていました。

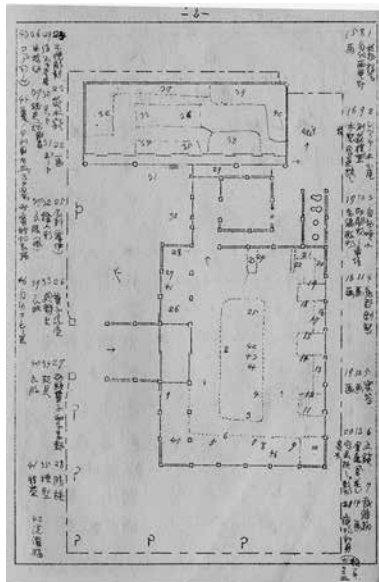
「なると第九」学習では、このほか各小学校の日程に合わせて、日本赤十字社徳島県支部の紙芝居を鑑賞したり、「なると観光ボランティアガイド」の説明を受けて、収容所跡地の慰霊碑などの関連施設を見学したりして、現在の「なると第九」がどのように受け継がれてきたか学習しました。



## 「美術工芸展覧会」製作品の配置について

1918（大正7）年3月8日から19日まで、鳴門市大麻町板東に所在した「板東公会堂」と四国霊場第一番札所霊山寺を会場として「美術工芸展覧会」（板東俘虜製作品展覧会）が開催されました。当初は17日までの予定でしたが、来場者が多かったことなどから期間を2日間延長し、5万人を越す来場者を楽しませました。絵画・写真・模型・手工芸品・食品など450点以上が展示され、その一部は販売されています。また、出品物を種類別に掲載した目録が日本語版とドイツ語版で『美術工芸展覧会案内』として販売されました。

当館はドイツ語版と日本語版の両方を所蔵していますが、日本語版は、教員で郷土史家として知られる飯田義資氏（1894-1973）旧蔵の資料です。いずれの目録にも会場となった板東公会堂と霊山寺境内の平面図が掲載されるものの、どこになにが陳列されたかの情報が記されていません。そのこと



（写真1）

ことから、目録の印刷段階では展示会場のレイアウトが定まっていなかったことがうかがえます。一方、日本語の目録には飯田氏自身の書き込みにより、大まかですが板東公会堂の陳列品のうち46品目の配置を読み取ることができます（写真1）。この目録によって収容所員の諏訪邦彦大尉旧蔵写真や、徳島立木製版（立木写真館）製絵はがきのいくつかに写された展

覧会光景の場所が会場のどこなのか特定することができました。今回はその一部を紹介します。

展示品の大部分が陳列された公会堂は、主会場として敷地中央の講堂（約155㎡）と、副会場として渡り廊下の北側の



（写真2）

建物（約64㎡）が使用されています。飯田の記録によると、主会場に入って正面中央に長さ6m程度の展示台が置かれ、それを囲むように壁際にも展示台が置かれていた事がわかります。正面中央の展示台には小屋の模型・自動噴水・鳥類剥製・手工芸品が並び、左奥の一角には徳島市内の割烹料亭「濱伊」の経営する所内の食肉加工所が、装飾されたソーセージを出品しており、その様子は写真でも確

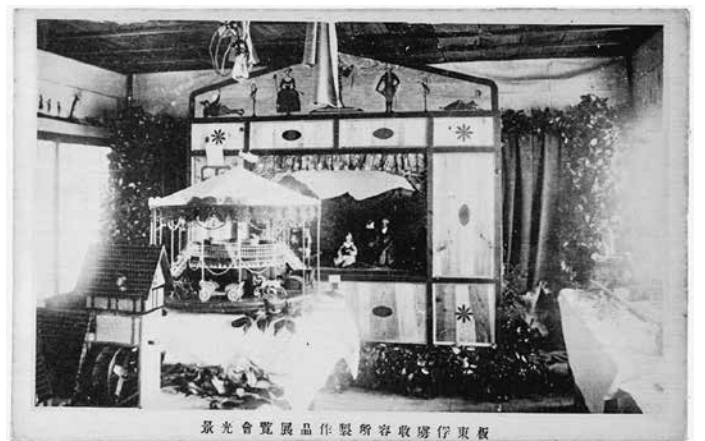


（写真3）

認することができます（写真2）。入り口右側の壁際には植物標本・コーヒーマーカー、右奥の壁際には楽器・手工芸品・雨量計・模型・印刷物が並び、正面奥と左奥の壁際には絵画・手工芸品が並んでいます。そして入り口右奥の一角にはソーセージや惣菜と、収容所内の菓子店「ゲーバ」が出品した「お菓子の家」が特段の装飾を施して展示されています（写真3）。

副会場は本来3室に区切られていたものを1室に仕立て会場としたもので、正面中央の展示台にはメリーゴーランドと水車小屋の模型が置かれ、その右側奥の壁面には、操り人形小屋が設置されています（写真4）。そのほかの壁面には玩具・衣服が展示されています。

飯田氏は展覧会の見学に赴任先の児童を引率して訪れたことを、当時教員仲間で組織した教育研究会「芳鳴会」の会報『芳鳴』第6号（大正7年6月刊）に「羊我生」のペンネームで「俘虜展覧会を観て」・「獨逸俘虜製作品展覧会所感」の二編としてまとめ寄稿しています。このうち「獨逸俘虜製作品展覧会所感」にはコーヒーマーカーや自動噴水など気になった作品について構造の解説や、ドイツ兵のものづくりに対する情熱に感心し、刺激を受けたことが記されています。板東における「美術工芸展覧会」について、日本側の記録が少ない中で飯田氏が書き残した二つの記録は、製作品の展示状況とその内容の濃さを来場者自身が記録した貴重な資料といえます。（森）



（写真4）

## 松江収容所長の出身地 会津から 115 人の訪問団



第一次世界大戦時に開設された板東俘虜収容所の松江豊壽所長の出身地・会津若松市から室井照平市長ら 115 人の親善団が 10 月 6 日、ドイツ館を訪問しました。

鳴門市は、松江所長がドイツ兵捕虜たちを人道的に処遇したことから第九アジア初演や地元民との交流が実現したことなどが基礎となり、現在の日独交流へと花開いた歴史的つながりを大切にしようと、平成 11 年 10 月に会津若松市と親善交流書を締結。会津若松市では友好都市との交流を促進しようと、市民親善使節団を結成し、この日の訪問となりました。

ドイツ館玄関ホールでは、鳴門市民らで結成されているアマチュア音楽劇団「エベレスト・ザ」や泉鳴門市長らが訪問団を拍手で出迎えたのち、「エベレスト・ザ」が松江所長の人道的な処遇を伝える音楽劇を披露。訪問団は温かい歓迎に大きな拍手を送ったり、カメラにおさめたりしていました。その後、館内の展示資料を見学していきました。

## 元捕虜ヨハネス・バート氏の孫が来館

板東俘虜収容所の元捕虜ヨハネス・バート氏の孫で一橋大学の大学院で教授をしているマイケル・コーバー氏が 12 月 4 日、ドイツ館を訪れました。

バート氏は板東俘虜収容所を解放された後、日本に残り日本人女性と結婚、希少金属の輸入事業などを経営したほか、能や狂言、歌舞伎などの日本伝統芸能を海外に紹介したかたです。コーバー氏の来館は、「第九」アジア初演 100 周年に向けた地元新聞社主催の座談会に招待された機会に、祖父の足跡をたどろうと、初代ドイツ館長でバート氏と交流があった西田素康氏の次女・小林夕貴さんの案内で実現しました。

最初に小林さんからコーバー氏に、元捕虜だったバート氏と西田氏との交流について、二人の交わした手紙や写真を見せながら、旧ドイツ館建設やリューネブルク市との姉妹都市盟約締結のいきさつやエピソードなどが紹介されました。また、ドイツ館職員が



らはリューネブルク市より元捕虜の子孫たちの情報や資料を提供してもらったりして、日独交流の発展に生かしていることなどを説明。「最近ではリューネブルク市からの使節団員が鳴門市からの団員より多くなっている」とか「相互にホームステイやビジットを積み重ね、両市民の友情が広がっている」などバート氏らドイツ兵捕虜と地元民との交流が引き継がれていることを話していました。

このあと、コーバー氏はドイツ館長から展示の案内を受け、祖父のバート氏が昭和 43 年に視力が低下している中、他の元捕虜に先駆け収容所跡を再訪している写真の前で、展示をじっと見つめていました。

## 独ニーダーザクセン州から 高校生ら 112 人が来館

2 月 10 日と 11 日にドイツ・ニーダーザクセン州から高校生ら 112 人がドイツ館を見学しました。

来館したのは徳島県と同州との友好提携 10 周年を記念し来県した同州の高校生 100 人と教員 10 人、同州文部省職員 2 人です。高校生の多くは鳴門市の姉妹都市・リューネブルク市のヨハネウム・ギムナジウムや徳島科学技術高校などと姉妹校提携をしている高校の生徒たちで、2 月 12 日に県開催の「アジア初演 100 周年記念ベートーヴェン『第九』演奏会」への合唱参加や学校間交流の合間に見学を訪れました。

高校生たちはドイツ人国際交流員の説明に耳を傾けたり、100 年前の「第九」初演再現ミニシアターでは捕虜の活動写真を熱心に見たりして、日独交流の歴史を学んでいました。



## ドイツ館イベント予告 2018年4月～6月

ユネスコ「世界の記憶」登録推進事業・「第九」アジア初演100周年記念事業

- ・ 3月29日(木)～4月29日(日・祝)  
「第九永遠なり」講演会連動企画展
  - ・ 4月7日(土) 13:30～15:30  
記念講演会「第九永遠なりー板東俘虜収容所の記憶をたどってー」 講師 徳島新聞社 藤長英之氏
  - ・ 5月29日(火)～6月24日(日)  
「第九」アジア初演100周年記念企画展
  - ・ 6月1日(金)  
17:30～ 松江豊壽銅像建立除幕式／ドイツ館前広場にて  
18:30～ よみがえる「第九」演奏会／ドイツ館前広場にて
- 「第九」アジア初演100周年記念イベント
- ・ 4月8日(日) 14:00～  
「板東俘虜収容所開所101周年記念コンサート 蘇る和洋音楽会」